

## 「特別プロジェクト『サイエンスコミュニケーター』の試み」が 開催されました

### 実施報告

**日時:** 2009年6月30日(火)17:00 ~ 18:30

**場所:** 湘南キャンパス 8号館4階 8-409教室

**司会:** 岡田 工(チャレンジセンター准教授)

- 内容:**
1. 2010年度新カリキュラムについて  
(岡田工 チャレンジセンター准教授)
  2. コンピュータルームを利用した演習授業について  
(崔一煥 チャレンジセンター教授、岡田工 チャレンジセンター准教授)
  3. 質疑



### 1. 2010年度新カリキュラムについて

岡田 工(チャレンジセンター准教授)

#### 【チャレンジセンター科目の位置づけ】

- 集い力I・II・III、挑み力I・II・III、成し遂げ力I・II・IIIは、「目標を見つけ、計画を立て、遂行する方法を体験的に学ぶ授業」として位置づけられている。
- プロジェクト入門I・IIは、「実際にプロジェクトを立ち上げ、運営する能力を高めるための授業」として位置づけられている。

#### 【チャレンジセンター科目の問題点】

- 科目名から内容が連想されにくい。
- 科目や担当教員によって人数制限がある。
- プロジェクト入門IIの受講者が少ない。



#### 【2010年カリキュラム変更の基本方針】

- より分かりやすい科目名と構成  
(例: 集い力1 → 集い力(入門)、集い力2 → 集い力(演習A/B))
- プロジェクト活動支援との連動を具体化  
(プロジェクト実践A/B/C/Dを開講し、プロジェクトに必要な知識・技術を教える)
- 副専攻化



## 2. コンピュートルームを利用した演習授業について

崔一煥(チャレンジセンター教授)、岡田工(チャレンジセンター准教授)

### 【授業の目的】

- ビデオ制作をテーマとして、プレゼンテーション・ビデオ編集・グループワークなどを体験することを通じて集い力を養う。

### 【授業の概要】

- ビデオ制作に必要なソフトウェアの利用のしかたを学ぶとともに、コミュニケーションの要素として自己紹介やグループワーク、プレゼンテーションの要素としてグループ発表や相互評価を取り入れている。
- 学期前半には、自己紹介スライドをパワーポイントによって作成し、その発表の様子を相互評価させるというワークを行った。また、相互評価の結果についてエクセルによってグラフ化し、報告書を作成させるという課題にも取り組ませた。
- 学期後半には、ムービーメーカーを用いたビデオ制作に取り組んだ。学生は数名でチームを組み、テーマの決定やシナリオ書き・絵コンテ作成・撮影・編集などに取り組み、最後に発表会を行う。



### 【授業の振り返り】

- 受講者人数は20～40名が適当と思われる。
- ものづくりを通じてコミュニケーションを取ることが良い学びの機会になっている。
- PCルームと一般教室の併用が望ましい。
- コンピュータスキルに個人差があることに何らかの対処が必要である。
- グループワークが中心の授業において、個人の成績をどのようにつけるかが問題である。

## 3. 質疑応答

### Q どのように成績評価をつけているか?

- A たとえば報告書については、必要な情報について他人が読んでも理解できるように丁寧に記述されているかという点を評価している。提出された報告書を採点する形式だと、結果だけを評価することになり、プロセスを評価できないのが課題である。

### Q ビデオ制作をする際には、はじめに例となる作品を見せているのか?

- A 例を見せている。ビデオの目的や役割分担、実際の作品、それに対する自己評価などについて例となるものを用意し、学生に見せてから制作に取り組ませた。

### Q グループをどのように組んでいるのか。

- A 学生証番号のリストに順番にグループ番号を割り振ってランダムに決めている。今後は、はじめのグループでリーダーシップの取れている学生を発見しておき、次にグループを組むときにその学生を上手く分散させるという方法も用いてみたい。

- Q** 授業内容がテクニカルな部分が多いように感じたが、その中で集い力の要素をどのように取り入れていく工夫をしていたのか。
- 
- A** PCを用いるばかりではなく、絵コンテを紙ベースで描かせることによって、チームメンバーが一枚の紙を囲んでコミュニケーションを取る機会を設けるようにした。また、チーム間で進捗状況を比較するなどして、互いにモチベーションを高めるような働きかけをした。
- Q** チーム分けをして作業させると、チーム内でのコミュニケーションはよく取れるだろうが、クラス全体としてのコミュニケーションが取りづらい状況にならないか。どうすればそのような状況を回避できるだろうか。
- 
- A** 全員ひとりひとりが自己紹介する機会を設けたこともあったが、受講者が多かったために時間がかかり、二週間分も費やしてしまうというデメリットがあった。チームを途中でシャッフルすることによって、異なるメンバーとチームを組むことを体験させられる。また、発表会をして互いに質疑応答をすることによって、チーム間でも交流することが可能になると思う。高い負荷をかけることで互いに支えあい絆が深まることもあるが、自由選択科目においてあまり負荷をかけると学生が離反していってしまうことが考えられるため、現実的には可能性が低いと思う。